

令和6年度 学生チャレンジプロジェクト 成果報告書

事業区分 ③学外向け教育イベントの実施

プロジェクト名 Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～

代表者
(所属・学年・氏名) 人間関係学部人間関係学科・3年・大岡怜愛

責任教員名
(役職・氏名) 准教授・佐川佳之

予算総額 58 千円

1. プロジェクトメンバー (氏名・学部・学年・役割)

【学内】

大岡怜愛・人間関係学部・3年・代表,書記
池口李心・人間関係学部・3年・会計
石濱亜香里・情報社会学部・1年・メンバー
石原茉奈・人間関係学部・3年・メンバー
太田莉奈・人間関係学部・3年・メンバー
水谷萌衣・人間関係学部・3年・メンバー
村佐音・国際コミュニケーション学部・3年・メンバー

【学外】

大脇綾乃・愛知淑徳大学福祉貢献学部・3年・メンバー
笠井翔太・メンバー
近藤弘基・名城大学都市情報学部・4年・メンバー
宮内菜摘・名古屋大学教育学部・3年・メンバー
平野りか・名古屋大学教育学部・4年・メンバー

2. プロジェクト開始の背景・経緯や目的等

Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～の開始背景として、日本の若者の社会参加・参画の現状に対し、若者として危機感を感じていたことが関係している。現在の日本の若者の社会参加・参画の現状として、令和3年6月国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター「高校生の社会参加に関する意識調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—」より、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」という項目において、日本は35.4%にとどまり、社会参加により社会が変わるという期待をする若者が少ないことが考えられる。また、同資料内にある両角達平氏による考察「高まる社会参加の意識 発揮できない影響力 —日本の若者は「自分本位」なのか—」には、「社会参加の意識はどの国の若者の間でも高まっている。他方で、社会が複雑なので関与したくない、政府の決定に影響を与えられないと答える若者が増えているのは、意見表明や社会参加の活動をする際に何かしらの障壁や阻害があるからではないか。声をあげても影響力が発揮できず、変わらない現実と直面することが常態化しているからではないか。故に、『関与したくない』『影響を与えられない』という社会参加への反発、あるいは諦めの感情が生じたと考えすることはできないだろうか。」と書かれている。実際にSugi Connect～「若者」×「〇〇」～を立ち上げたメンバーは、社会参画をする中で意見表明が可能であっても、「若者だから思慮分別ができない」といった理由で表明した意

見が実際に反映されない、といった経験がある。声をあげても影響力が発揮できず、社会は変わらない一方で、見せかけの若者の社会参加・参画が成立してしまう現状に対し、若者として若者が影響力を発揮し、社会や地域とのつながりを持ち続けること可能となる若者主体の場づくりや意識づくりを行う必要があると考え、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～を始動した。

引用資料

国立青少年教育振興機構 令和3年6月 「高校生の社会参加に関する意識調査報告書—

日本・米国・中国・韓国の比較—」（最終閲覧日：2025年3月23日）

https://www.niye.go.jp/pdf/210622_02.pdf

3. プロジェクトの成果及び達成状況

Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～は、全8回のワークショップを実施し、地域住民や地域団体との対話を通じて、若者主体の場づくりと意識づくりを行った。

6月に実施した第1回のワークショップ「若者」×「若者」～自分と相手を尊重することとは何か～、では、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～に参加するメンバーの顔合わせと Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～がワークショップにおいて重要視する「対話」を考えることを目的として、合意形成のワークを10名の参加者が3グループに分かれ行った。

7月には第2回ワークショップ「福祉の勉強会」を開催し、第3回での交流・対話に向けた勉強会を行った。3回で交流・対話を予定していた全国こども福祉センターや、当日のテーマである「福祉」とは何かを学ぶことを目的として、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～のメンバーで集まり実施した。参加者は9名で、福祉の本来の意味である「幸福」とは何か、劣等処遇、パターンリズムから自分の持つ福祉へのまなざしの再検討を行った。

第3回ワークショップは、8月に「若者」×「福祉」～福祉と参加参画～というテーマで行った。本ワークショップでは、若者として福祉に参加参画することとは何かを考察することを目的として全国こども福祉センターの活動に参加している若者たちとの対話を行った。全国こども福祉センターからは9名、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～からは、7名が参加し、合計16名が参加した。「学問」が交流や対話の壁にならないよう謎解きゲームやクロスワードを Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～のメンバーが考案し、それをもとに交流した。参加者同士のコミュニケーションが進んだのちに、全国こども福祉センターの諸活動に対する質問なども行った。また、ワークショップ終了後は、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～のメンバーが全国こども福祉センターの街頭募金に参加し、実際に体験したことから募金活動に対する通行人のまなざしや、支援者と被支援者の区別が無い福祉的活動の意義を考察した。

10月に実施した第4回ワークショップ「若者」×「居場所」（第1回）～居場所と権利～では、名古屋市緑区を拠点にし、子どもの権利を重視して活動しているこどもNPOと対話を行った。こどもNPOからは5名、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～からは8名が参加し、合計13名が参加した。今回のワークショップでは、居場所とは何かを考え実践するために、各々が対話を通して得た考えや疑問を持ち帰ることを目的に行った。子どもの権利と子どもの権利条約を読んで自分の理想の居場所で保障されていてほしい権利を選択し、理由とともに発表し合うというワークや、子どもの居場所づくり事業の実践者との対話をもとにして居場所づくりで大事にしたい価値観の共有や居場所とは何かという問いを共に考えた。

11月の第5回ワークショップ「若者」×「居場所」（第2回）～居場所と権力～は、愛知PFS協会と対話をした。第5回ワークショップは、権力を持つ個人としての自覚を持ちながら居場所づくりをすることを考えることを目的として行った。愛知PFS協会からは5名が、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～は9名が参加し、合計14名で行った。子ども・若者に対し貼られているレッテルを二重基準と二重意識から考察し、子ども・若者にレッテル貼りをし続け無意識的に権力性を保持してしまう現状や、子ども・若者が大人に権力性を持たせてしまう場面など、役割からも権力構造を考えた。

第5回ワークショップと同日に第6回ワークショップ「若者会議」を行った。大阪府にあるデモクラティックスクール「ASOVIVA」の運営者（21歳）と立候補年齢を引き下げのためのプロジェクト

で裁判を起こしている原告の1人(21歳)とスギコネメンバー9名、愛知PFS協会職員1名の合計12名で、社会課題にアプローチする際に感じる障壁について対話をした。不登校や若者の立候補年齢など、社会課題に実際にアプローチをしている若者の2名と対話し、若者として何ができるのか鮮明にすることを目的として第6回ワークショップは行った。

第7回ワークショップ「若者」×「地域」～自分と他者、地域、社会～は、2月に実施した。地域住民に声をかけ、8名の参加があった。Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～からは、8名参加者がいたため、第7回ワークショップは合計16名で行った。「福祉」や「居場所」を若者としてどのように考え、どのような社会していきたいのか、そのためにどのような行動が必要であるのか考え発表し、地域住民の8名とさらに考えを深めることを目的として行った。

第8回ワークショップは、第3回ワークショップで交流した全国こども福祉センターとスポーツを通じた交流をした。継続的に互いの活動に参加し合う基盤づくりを目的として行い、全国こども福祉センターからは9名、Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～からは7名が参加し、合計16名でスポーツをした。場所は椙山女学園大学星が丘キャンパスの体育館を利用し、バドミントンやサッカー、バスケットボール、ドッジボール、障害物競走、だるまさんが転んだなどさまざまなスポーツを通じて交流を行った。

以上に記した全8回のワークショップを通して、社会参加・参画をするための基盤を若者が主体となり形成していったことや、他大学、他団体との交流をする場をつくりさまざまな活動に Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～のメンバーをつなげたこと、学び合える場をつくりだしたこと、安全に話すことができる場として Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～が機能したことが成果としてあげられる。

4. 大学や地域・社会へ与えた影響

Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～が大学に与えた影響は、他大学や他団体との交流する機会を大学の施設を活用して実現できたことである。現在は、椙山女学園大学に通う学生のみが自由に大学の施設利用をすることが可能である。学生チャレンジプロジェクトを通し、椙山女学園大学の学生が中心となっていく活動であれば、大学を活用した場づくりが可能であったということは、大学及び椙山女学園大学に通う学生に影響を与えることであると考えられる。

地域・社会に与えた影響は、椙山女学園大学が学生と地域団体の交流をすることが可能な場を提供し、学生主体の地域活動や社会活動を支える取り組みを大学として行っているという印象を与えたことや、若者が主体となって学び合い、活動に参加し共に課題を考えようとする意欲を発信できたことである。

5. 今後の課題

Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～の今後の課題は、大きく5つある。

1つ目は、場の不足である。椙山女学園大学に通っていない学生や若者、地域住民などは容易に椙山女学園大学に入場することが不可能である。そのため、若者主体の活動において、メンバー全員がどのように場を見つけ集まるかということが今後の課題である。

2つ目は、学生同士のつながりをどのように生み出していくか、ということである。椙山女学園大学内で配信されているジャーナルは、学生から学生に配信することが想定されていないため、学生同士のつながりはなかなか構築しづらい。このことから、どのように学生の活動を発信していくのが課題であるといえる。

3つ目は、どのように継続していくかということである。現在 Sugi Connect～「若者」×「〇〇」～に参加しているメンバーの多くは、来年度から4年生になる。また、卒業し社会人になるメンバーもいる。そういった参加メンバーの状況を加味したうえで、2024年度以降はどのように活動を継続していくのかを考える必要がある。

4つ目は、交流や対話をした団体や人とのつながりの継続である。2025年度からは、交流した団

体の活動にも **Sugi Connect**～「若者」×「〇〇」～のメンバーも参加するため、つながる基盤として継続させるにはどのような形式にするのか、ということは課題である。

5つ目は、多世代との交流である。2024年度の活動は、地域団体との交流が主であったため、子どもへのアプローチはあまりできていない。若者と大人、若者と若者だけに囚われず、幅広い年代を対象とした活動を展開していく必要があると考える。